いけない誘惑水着

グラビアアイドルの撮影日記

草飼晃
挿絵／大柴宗平

立ち読み版

KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　あぶない下着スタイル・女流カメラマンの襲撃……4

第二章　うつむき砂浜素肌・グラビアアイドルに最接近……54

第三章　つまずき女湯体験・おさななじみのお説教……111

第四章　はにかみ誘惑果実・グラビアアイドルとの初夜……179

第五章　みだらなフォトセッション・禁断の海岸プレイ……228

登場人物 *Characters*

桜祐美香
（さくら　ゆみか）

「あんしん三次元女子」のニックネームで知られるGカップグラビアアイドル。大学では西洋史を専攻しており、清楚で知的さを感じさせる容貌と、むちむちと豊満なバストをあわせもつ照れ屋な少女。

荒花加奈
（あらはな　かな）

フリーの女流カメラマン、祐美香のデビュー時からずっと彼女の写真を撮り続けている。“荒花・ザ・ワールド”のあだ名の通り勝ち気でワンマンな才女。

菊池結
（きくち　ゆい）

加奈の推薦で祐美香の撮影に同行することになった、英彩出版勤務の女性編集者。実は宏之の幼馴染みでお姉さん的な存在。

佐橋宏之
（さはし　ひろゆき）

関西の大学に通う大学生。中肉中背の平凡な青年。一ファンとして祐美香に憧れていた。

なんだかバイト先で新人の女の子に仕事を教えたときの感じみたいだなと宏之は思った。鈴を鳴らすような声が耳に心地よい。

でもなにを言えばいいんだろう。

「ええと。ええと」

「はい……？」

（ゆ、祐美香さんがぼくを見つめてる！　ぼくの次のことばを待っている？）

なんていうか。気まずいというのとも違うような。違わないような。

考えているうちに旅館に着いてしまった。後ろから追いついてきた女流カメラマンは宏之に一瞥を投げかけると、水着アイドルの手を引いてさっさと行ってしまった。

「ありゃあ……」

「どうかした、ヒロくん？」

いちばん後ろだった編集者にも追いつかれた。

「い、いや、別に、どうもしないけど……」

「ふうん？　へんなヒロくん」

「べっ、別にぼくはへんじゃないです」

さすがに夕食までいっしょというわけにはいかなかった。相手はお客様。宏之は旅

館側の人間だ。
「ふあーっ、なんだか疲れたな……っ」
皿洗いを全部引き受け、戸締まりをして回ったら、もうそれだけで午後の九時を過ぎていた。宏之は自分用にあてがわれた部屋の畳の上に寝ころんだ。
（エアコンが全室にあるってのは救いだよな……）
台風並みの低気圧がやってきているらしかった。大粒の雨が叩きつける音とごうごうという風の音がものすごい。壁や柱がときどきミシミシと鳴る。
「ちょっと今いいかしら」
ドアがいきなり開いた。
「えっ？」
全室和室とはいえ各部屋の入口は洋室風のドアだ。見ると人影が宏之の返事も待たずにするりと室内に入りこみ、近寄ってきた。
「え、あ、荒花……さん」
荒花加奈だった。
長身の女流カメラマンが身につけているのは昼間と同じ無個性なポロシャツにチノパンツ。

すでに入浴を済ませたようで、頬は少し紅潮しているようだしショートの黒髪も生乾きでつやつやときらめいている。ほんのりと湯上がりのいい香りが漂ってくる。
ふつうなら風呂の後は旅館のゆかたに着替えるところだろうに、と宏之は思う。遊びに来ているわけでもないし宴会があるわけでもないのだからこれはこれでまあふつうなのかな、と考え直した。ホテルに泊まっている感覚なのかもしれない。
でもいったい。
プロのカメラマンがなんの用だろう。
「きみ、歳いくつ？」
「に、二十一、ですけど……」
「そう。若いのね。若いといろいろたいへんよね」
「は……？」
なにを言いたいんだ、この人は？
「そんなに警戒しなくてもいいのよ」
加奈は苦笑すると、立て膝をついて宏之のそばにすり寄ってきた。
「ちょっと昼間、キツい言い方しすぎたかしら？」
「え……？」

「こわがらないの。あのね、欲望をもてあましてるのは、別にきみだけじゃないのよ」
「よ、欲望……？」
結との雑談から知ったのだが、荒花加奈は御歳三十二歳でこちらも独身。
桜祐美香のデビュー写真集の大ヒットがきっかけでフリーカメラマンとしての地位を確立し、近年はグラビア写真よりもアート系の作品を撮る方がメインになっているとのこと。ただ桜祐美香の写真は一貫して撮りつづけている。
長身の才女は宏之の手首をいきなりぎゅっと握ってきた。
なんなんだ、この展開？
女性からそんなさわり方などされたことのない宏之はびっくりしてしまって咄嗟にはなにも言えない。
「あのね。加奈はねえ」
「は、はい……」
女流カメラマンが自分のことをわたし、ではなく名前で呼ぶことは撮影中から気づいてはいた。宏之の周りには子どもならともかく、いい歳をした大人にそういう人間は今までいなかったから、なんだこの人は？　と思ったりもしたのだが……。
（い、意外と、かわいいのかも……）

女流カメラマンは初心な青年がさらに驚くような行動に出た。
「きみみたいな男の子って、本当はきらいじゃないんだよ」
掴んだ手首を引っ張り、自分のポロシャツに触れさせたのである。ちょうど乳房のふくらみの部分に。
「な、なにを……？　わ、わ」
思っていたよりずっと弾力の豊かな感触が手のひらいっぱいに返ってきた。少し指を動かそうとしただけで、くにゅん、とやわらかくかたちを変える。服越しでも手のひらに熱を感じているような気がする。
（お、おっぱいに、さわっちゃってる……）
初めての体験だ。
もちろん桜祐美香ほどのボリュームはないのだろう。でも大きめのポロシャツのせいで気づきにくかっただけで、女流カメラマンの胸もかなりの豊かさのようだった。ぴちぴちのゴムボールをもっとやわらかくしたような手ざわり。
（お、女の人ってこうなんだ……？）
くにっ、と指腹をもう少しだけめりこませてしまったとたん、
「ふ……ン」

年上の女流カメラマンはくちびるの間からせつなそうに息を洩らした。目が少し細められている。風呂上がりの顔の紅潮もまだそのままのよう。

「え。ご、ごめんなさいっ」

手を引こうとしたが、それよりも強い力でまた引っ張られた。

（ふわ。わ……っ）

「いいの。きらいじゃないって言ってるでしょ？」

もう一方の手で頭を抱きよせられた。

「ふわわ。ふむ……ッ」

少しだけ肉厚気味のくちびるが青年の口にかぶさってきた。女流カメラマンの口は見かけ以上にやわらかかった。宏之にとって初めての経験なので他の人と比べられはしない。

でもキスってこんなに気持ちのいいものだったなんて知らなかった。

（ん、こ、これ、は？）

さらになにかが宏之のくちびるにヌルッと触れてきた。相手の舌だとわかるまでに少し時間がかかった。唾液でぬめぬめと濡れた年上女性の舌はおたがいの体温よりも熱く、くちびるとくちびるの合わせ目をなぞられただけで腰がしびれる。

そのまま力が抜けていく……。
（ど、どうかなりそう……ふわわぅ！）
そのまま侵入してきた濡れ舌に舌先をつつかれた。弾力のある舌といっしょに唾液も流れこんできた。鼻では相手の鼻息も受けている。加奈の素肌の匂いがわかった。口の中に広がる唾液は甘くもなければ苦くもなかった。でも思っていたより粘度が高く、歯茎のくぼみのひとつひとつにからみついて残っていくような気がする。
（気が、気が遠くなってきた……）
そんな宏之をもてあそぶように三十二歳の才女は吸引を始めた。じゅる、じゅる、と音をたてて青年の唾液を吸いこんでいく。そうしながら腕を摑んでいた手で宏之のTシャツの上から胸板を撫でてきた。なめらかな指で胸から腹にかけてツッとなぞられただけで下腹部へ血が流れこみ、ペニスがジーンズを内側から押し上げてしまう。
才女は口を離して青年をジッと見つめた。
「加奈のこと、淫乱だと思う？　初対面のきみにこんなことするなんて、おかしな女だと思ってる？」
「い、いえ、そんなことは」
「あらっ……きみ、興奮してきたのかしら？」

加奈の指がさらに下がってジーンズの盛り上がりに触れてきた。離れたくちびるとくちびるの間ではこまかな気泡の混ざった唾液の糸が伸びていた。勃起ペニスの真上を撫でられて腰に甘い電流がひりひりと流れた……。

「ひ、ひううう」

「うふふ」

くちびるの端をつり上げるようにして笑うと、積極的な年上女性は宏之から身体を離し、思いだしたようにつぶやいた。

「この部屋、なんだか暑いわね。冷房弱いんじゃない？」

「わ、荒、花、さん、なにを……」

宏之はまだ息をするのにせいいっぱいでうまく口がきけない。

両腕を組み、めくり上げるようにしてポロシャツを脱いだ三十二歳の女流カメラマンは、次にベルトをゆるめた。腰骨にひっかかっているチノパンツをするすると降ろし、なめらかそうな太ももをくねらせながら足首から抜き取った。

「うわ、うわ……うわ」

見事なプロポーションだった。男ものの服で隠されていたのだ。腰のくびれの位置が高く、張りのいい腰骨から優美な太ももまでのラインも見事だ。レースで飾られた

大人っぽくて女っぽいブラとショーツ。
（す、すごい……）
昼間見た桜祐美香の抱き心地のよさそうなポンキュッポンとは少し違う。完成された大人の体型とでも言おうか。よけいな脂肪がそぎ落とされていたところに年齢相応の脂がしっとりと乗り始めている感じ。
「加奈の身体、どうかしら？」
色白の祐美香と対照的で全体的に軽く日焼けしているのも健康美に一役買っていた。グレーがかった下着を、意外とたっぷりとした乳果実と熟した臀球がムチムチと盛り上げている。それを見ただけで青年の股間のものは限界まで勃ち上がっていた。
で、でも。これはまずいんじゃあ……？
「あ、あのあのあの！　荒花さんっ」
「ああもう。静かに。さわがないで。きみに襲われたって大声出すわよ」
「はああっ？」
急に面倒くさそうな口調になってそんなことを言い出す加奈。
まったく意味がわからない。
部屋の外では相変わらずごうごうと風がうなっている。さわがないでもなにも、よ

ほどの大声を出さないと廊下には届かないだろう。
「で、でもぼくは」
なにもしていない。なにかするつもりもないぞ。そっちが勝手にやってきて勝手にキスをして勝手に服を脱いだだけじゃないか。
でも女性に免疫のない青年は下着姿の美人に圧倒されて言い返せなかった。
それをいいことに。
「ンふ」
加奈はふたたび膝をついてにじり寄ってきた。
指が宏之のジーンズにかかった。ベルトをゆるめ、馴れたような手つきで引き降ろしていく。その動作でブラジャーの中のおっぱいが大きなプリンのように揺れる。
「ちょっとお尻上げてね」
「え……ちょっと、待ってください。ふわ」
そのままジーンズといっしょにトランクスを膝まで下げられてしまった。エラを漲らせた亀頭は真っすぐ部屋の天井を向いてしまった。さらに美女の視線を浴びただけで熱湯にも似たぴりぴりしたしびれが幹のあたりを駆け巡る。
「あらっ……なかなかね」

一瞬びっくりしたような顔を見せた加奈だが、次の瞬間にはまた不敵にふふふと笑い、細い指先を咥えて唾液で濡らすと青年の男根にするりとからみつかせてきた。
「ふわわ」
尾てい骨から腰の芯にまでゾクリとしびれが走り、肉棒はまたいちだんと体積を増した。血管を浮かび上がらせたキチキチの表面を女流カメラマンの指腹が、触れるか触れないかという絶妙のタッチで刷くように擦ってくる。
「握ってほしい？　握って、もっとちゃんと擦ってほしい？」
「それはその……」
「どっちなの？」
自分でするのとは違って相手がどんなさわり方をしてくるのかわからない。そんな期待感だけでもう宏之は出しそうになっていた。理性は、なにかおかしい、断れ、と訴えていたが、男としての本能で、はいと答えてしまっていた。
「おねがい、します……」
「あらそう」
ひとさし指の先がツゥと、勃起した幹の上を亀頭の方向に向かって撫でた。
「ふわぁあああッ」

ほとんど未知の快感がぞわぞわとペニスの付け根から這い上がってきた。同時にピンク色の亀頭の先では精液そっくりの白っぽい先走り汁がぽこりとこぼれ出た。
「あううう」
ぴりぴりとつづく愉悦がたまらず変な声を出してしまう宏之を見て、女流カメラマンは機嫌よさそうに笑みを浮かべる。
「どうしたの？　もうイッちゃいそうなの？」
「あ、荒花先生……これは、いったいどういうことですか……？」
昼間の撮影のときに祐美香や結がしていたのと同じ呼びかけ方で尋ねる。馴れないキスのせいで息が苦しくてまだうまくしゃべれない。
一方、熟した肢体のカメラマンの方は平然とした様子。
「加奈の気持ちをきみにわかってほしいだけよ」
「き、気持ち……っ？」
ひと目惚れとか？　年上の女の人がぼくに？　そんなことがあるわけない！
「鈍い子ね。まだわからないの？　だったら、いいわ」
「な、なにが……？」
「わからせてあげる。口でしてあげようか」

えっ？
「く、口でって？」
「おしゃぶり」
ショートの黒髪をさっと揺すって年上女性は平然とそう言った。
「お、お、お、おしゃぶりいぃ？」
「どうなの？　男ならはっきりなさい。してほしいの？」
理性はやはり拒めと言っていた。しかし肉棒はいまだギンギンにそそり勃ったままだったし、陰嚢の中で睾丸もぶるぶると揺れて射精のときを今か今かと待っている。童貞青年はこくんとうなずいてしまった。
「あらそう」
加奈は短くそう言うと、一回舌舐めずりをしてからすっとその大人っぽい美顔を近づけてきた。
でも、すぐには陰茎に艶めいた口を触れさせてはこなかった。
やわらかい手指が陰嚢をふんわりと持ち上げた。
「くあっ……っ」
ぞわぞわした快感が下腹部から背中に突き抜けた。その様子を怜悧な瞳で見つめな

がら美乳の持ち主は、睾丸の大きさを確かめるようにさわ、さわ、さわ……と揉みこんできた。
「せ、先生。やっぱり、やめてください。て、訂正します。ぼくが間違ってました」
「きみのおちんちんはそうは思ってないみたいだけど？　身体は正直よねえ？」
「ゆ、指、もうだめっ。くおおぉ」
やわらかい指腹の感触がたまらない！　さわりさわりとまさぐられているかと思うと不意打ちのように玉を握りしめられる。産みたての鶏卵を割らないように気をつけながらまさぐるみたいに、年上女性の指がくにゅくにゅと精巣を撫でてくる。指と指の隙間からはみ出そうになると指の関節で食い止められる。その刺激でさらにペニスに血液が流れこんできた。
「先生、その揉み方、ヤバい……ぼく、もう、ヤバいですから……っ！」
「ふうん。もう？　見かけは立派だけど、まだまだ子どもみたいね？」
くちびるを近づけて、加奈は息をふうーっとキチキチになった亀頭に吹きかけてきた。限界まで膨張していたはずの肉棒がたちまちさらにひと回り大きくなった。と同時に先端からまたにゅるりと透明なしずくが洩れる。精液を噴き出させたときと同じくらいの快感が弾けた。

「ふわあぁ……ぁ」
うめく宏之を見て加奈はまたちょっとびっくりしたような顔を見せたが、それがすぐに余裕のある笑みに変わる。
「うふふ」
相も変わらず玉袋をさわさわと揉みながら、もう一方の手は青年の太ももの内側にあてがわれた。そんなところ感じるところではないと思っていたのに……。
「くおぉぉ……せ、先生、そ、そこだめ。撫でないで」
「加奈の手、気持ちいいの？」
あごに力をこめて放精をこらえながら宏之はかろうじてかくかくとうなずいた。
「あら、我慢してるのかしら？　どうして？」
尋ねてくるそのことばといっしょに息が亀頭にかかってくる。その刺激だけでもさらに先走りがぷくぷくと溢れ出て畳の上に細い糸みたいに垂れ落ちた。射精そっくりの放出感が下腹部をしびれさせている。
（むぅぅ……出してるわけでもないのに……なんでこんなに気持ちいいんだよぅ！）
もう屈服も時間の問題だった。
女流カメラマンもお見通しのようだ。

この発言にはまた全員が目を丸くする。
「佐橋くん、そのままでいいから、祐美香をかわいがってあげて」
「い、いいんですか……ほんとに……？」
「いいわ。ただし、万一のときの責任は全部佐橋くんが持つのよ。男だものね。責任、取れるわよね？」
（な、なんだそりゃあっ？）
一瞬ひるみかけたが、今朝自分をかばって祐美香があんなことまで言ってくれたことを思いだした。
（そうだ……今度は、ぼくが、祐美香さんの気持ちに答えなきゃ……）
「わ……わかりました。もしものときはぼくが全部責任を持ちます。祐美香さんのことは一生かけて大事にします」
「えらいわ。よく言ったわね佐橋くん」
でも。もしこのまま祐美香さんを妊娠でもさせて万一それが世間にバレたら、全国の桜祐美香ファンから何千回も殺されそうな気がするけれど……。
（いやいや。それでもぼくは）
祐美香さんが欲しいんだ。

「じゃ、じゃあいくよ、祐美香さん」
「え、でも、ここで……？　やだ、恥ずかしい」
有無を言わさずあてがった。
女子大生はセミロングの髪を左右に揺らして弱々しく拒絶の意思を示した。でもすぐに自分から腰を持ち上げて挿入しやすくなるようにしてくれた。その動きで腰が少しよじれ、乳房がぷるるんと揺れた。まるで宏之を誘ってでもいるかのように。
先ほどイッたせいでか少し開いたままの濡れた陰唇。その間に亀頭を押し当てたままグッと腰を突き出す。ペニスは女陰粘膜の上を一回、二回、ずるっ、ずるっ、とすべるように動いた。三回目。キチキチの亀頭はほぐれかけの狭い狭い膣口を捉えた。
勢いをつけて腰を前に送りこむ。
男根が埋まっていく……。
膣口をくちくちと押し拡げ、肉粘膜輪に侵入していく。狭い粘膜輪をこじあける亀頭のエラが痛い。めりめりと沈みこませるだけで宏之には一気に絶頂感が迫ってきた。
「くぉおお、祐美香さん、キツい……」
「う、うっう、うう……ッ」
九十センチバストのグラビアアイドルは、まるできのうの初めてのときと同じよう

な表情になっている。
（祐美香さんのおま○こ、やっぱり、すごい……ッ、熱い……ッ）
自分のおちんちんでやわらかな粘膜をこじあけていくあまりの気持ちよさに、宏之は目の前が真っ白になったように思った。まるで自分の身体がすべて硬いペニスとなり、温かい女性器にくるまれているかのように思えていた。どこまでが自分の身体でどこからが愛しい恋人の身体なのかわからなくなっている。
勝手に腰はガシガシと動き始めた。
「うう、す、すごい、祐美香さん、すごい、祐美香さん気持ちいい……」
「ああっだめ、そ、そんな、乱暴な動かし方は、しない、で、だ、だめぇ……」
と。
見かねたように、結が口を挟んできた。
「ヒロくんヒロくん。祐美香ちゃんはまだ痛がってるから……ヒロくんみたいな若い男の子は女の子の中で動きたいのかもしれないけど、それはちょっと我慢して。祐美香ちゃんも、あんまり痛かったらヒロくんにもっとはっきりそう言っていいんだからね。言わないと相手にはわからないから」
「は……はい。宏之くん、ごめん。わたし、まだ、痛くて……」

泣きそうな声でそう言われてしまった。
「ああ……ご、ごめん……」
腰の動きを止める。
ただ。宏之にはよくわからなかった。
「でも祐美香さん……まだ痛いの？　痛いのは最初の一瞬だけじゃないの？」
そんな話をどこかで聞いたことがあるような。
「ヒロくうん。それ間違いだよ。ま、個人差もあるけど……最初の数年は女の子は中は痛いだけなんだから」
「え……まじ？」
（す、数年っ？）
初めて聞いた。
「まじだよ。だから、やさしくしてあげてね」
「……うん……わ、わかった……結姉ちゃん」
どこまで我慢できるか自信はないけど。祐美香さんを気持ちよくさせてあげられる自信もなくなってきたけど……。
力なくうなずいた宏之の横で、下着姿の女流カメラマンが口を挟んだ。

「大丈夫よ。加奈もアシストしてあげるから。佐橋くんはしばらく、そのまま、なるべく動かないで静かにしていて」
「は、はい……荒花先生」
動かすのは我慢してみる。確かに、好きな女の子の膣に包まれてジッとしているだけでも身体は悦びを感じていた。きのうおとといとさんざん射精したせいでか、まだまだもちそうではあった。そんな余裕はついピストン運動したいという欲求につながってしまって……。
「あ……っ、あ、あ、つらい」
「あ、ご、ごめん、祐美香さん」
また腰が勝手に動いてしまったようだ。
美顔のアイドルは歯を食い縛ろうとしている。くちびるがゆがみ、眉が寄せられる。快感をおさえこもうとしているのではなく、やっぱり痛みを我慢しているのかもしれなかった。額にはふつふつと大粒の脂汗が次々に浮き出している。いや。汗だけではなかった。目尻からとろりと涙がひと粒……。
（そ、そんなにつらいの？）
さすがに平然とはしていられなくなってきた。

でも宏之がなにかする前に。
「祐美香。今気持ちよくしてあげるからね。菊池さんも、さあ」
「はい先生っ」
加奈と結が左右から祐美香のGカップ乳房に、はむっと顔を寄せた。
「あぁ、あぁあ、胸は、感じるから、だめ……」
くちゅくちゅと左右同時についばまれ、乳首はひときわぶりゅっとふくらんだ。
それに呼応するように、宏之のペニスを受け入れている粘膜ひだがざわついて幹にいっそうからみついてきた。
(ゆ、祐美香さんの身体の方から……ぼくのおちんちんを受け入れてくれてる?)
うれしくてまた動かしそうになったが、ぐっと踏みとどまる。
グラビアアイドルが身体をよじろうとした。それをおさえつけるようにして三十二歳の独身カメラマンと二十六歳の独身編集者は胸愛撫をつづける。結はそそり勃つ乳首の感触を味わうかのように、しこしこと舌とくちびるで舐め擦る。加奈は祐美香の上体を抱きかかえながら背中に腕を回して、自分の顔に祐美香の温かそうな乳房をむにっと密着させ、鼻先を押しつけたままはあはあとみだらに息を吹きかけている。
すると。

（ああ……祐美香さん！）
派手なピストン運動なんかしていたら気づかなかったかもしれなかった。膣を通して年下の恋人のとくとくという体内の脈動を感じる。祐美香の体温も。筋肉のひそかな動きも。骨のかすかな動きまでもが。ああ。
「あぁ……なにかへんになる……ひ、宏之くぅん、へんになるわたしをきらいにならないでね……っ、あ、あっ」
「き、きらいになんか、ならないよ」
みちっ、みちっ、みちっ……からみつこうとする一方の微細な熱い粘膜ひだを強引にかきわけるようにして肉茎をそっと奥に進ませた。迎え入れながらひだは宏之の意図を察したみたいに、締めつけつつも内側へ引きこんでくる。それと同時に祐美香のぐっしょり濡れたゴージャスな身体は、いっそう力が抜けてくにゃりとなっていた。
宏之の腰の動きに気がついた加奈だが、それをとがめることはしなかった。
「いいわ。佐橋くん、少しずつ動かしていいわ……でも、そっとよ。ゆっくりよ」
「はっ、はい……」
ぐにっ……いったん少し引き戻し、それをまたグイッと深く挿しこむ。膣粘膜のひだは歓喜にざわめいて、痛みに近いような感覚を宏之のエラに与えてくる。でも痛み

を上回るはっきりとした快感の爆発の予感が下腹部の底で弾け始めていた。
「や、やだ、わ、わたし、感じちゃって、恥ずかしい……どうしよう……こんなに」
（ぼ、ぼ、ぼくも、もうこらえきれないいい……っ）
大粒の汗を浮かべた祐美香の表情にもいっそう欲望を刺激されて、宏之はまた腰を動かし、一気に奥まで衝いていた。とたんに今度は粘膜全体が重いゼリーのように弾んでとぷんと肉棒を呑みこんでいた。
「ひあううっ……っ、は、はげしっ、だめえ、それ、だめ、そんなこと……ッ！」
甘ったるい匂いとともに汗が飛び散り、セミロングの髪が揺れる。たぷんたぷんとおっぱいも揺れる。それがおっぱいにむしゃぶりついている加奈や結も興奮させていた。ふたりに抱きつかれたようなかたちのままで腰が右に左にとうねる。と。
「ふひいやああっ」
二十歳のグラビアアイドルはひときわせつなげな嬌声を上げた。ゴルフボールのようなコチコチの亀頭がグッと子宮口を持ち上げていた。愛液のシャワーを浴びて俄然、宏之の腰遣いは勢いを増した。男子大学生の若い肌と現役女子大生のうつくしい肌がぱんぱんと音をたてて鳴り、ずりゅ、ずりゅ、ずりゅ、と粘膜が粘膜を強引に擦る音も響きわたる。

「ゆ、祐美香さん、すごい……熱いのが締めながら――からみ、ついて、ううっ」
「だ、だめえ、す、すごい、硬いのが、ごつごつしたのが、だめえ……今、だめえっ」
肉瘤のようなペニス胴体の盛り上がりに刺激を受けるのか膣粘膜もキュッキュッと収縮して男根を責めてくる。はちみつにまみれた何百本という熱い輪ゴムの束で絞りこまれているようだ！　このままでは先に達してしまう……それがわかってはいても、もっともっととせがむような腰の動きに自分を抑えることなどできなくなっていた。
そんな宏之の表情を読んだのか、加奈が急に話しかけてきた。
「佐橋くんは祐美香のどこが気に入ったの？　おっぱい？　太もも？　お尻？」
「か……身体じゃありません……ゆ、祐美香さんていう、人間を、好きに、ううっ」
「あらそう。それならもっともっと我慢できるわよね？　おま〇こ目当てで好きになったんじゃないのよね？」
「もっ、もちろんです……う、う、ううっ」
膨張した肉びらも肉茎を離すまいというようにぴっちりと寄り添っている。祐美香の勃ち上がった陰毛の先が宏之の一ストロークごとにその下腹部をマッサージする。
「佐橋くん、もっと抑えて！　自分の欲望は忘れなさいったら！」
「む、無理ですっ。もう、もう、ぼく、身体がっ。勝手にっ」

「……しょうがないわねえ！　ああもう！」
宏之の腰のうねりに合わせるように膣肉も肉棒を咥えたまま、またひとうねりした。くぐもったうめきを上げる宏之の目の前で祐美香のおっぱいから口を離した加奈は、今度は青年とアイドルの結合部にその指を伸ばしてきた。包皮から顔をのぞかせた祐美香の漲りきったクリトリスを揉み潰すようにつまんでいた。とたんに。
「ひいっ、先生っ、そ、そこぉ、だめえぇぇ！」
「うおお、祐美香さんっ」
膣が締まる。祐美香のととのったあごが上を向いていく。白い喉首が晒される。そこに結がたらりと唾液を垂らした。上気して真っ赤になった頬と頬の間で鼻もまた朱に染まり、鼻孔とくちびるからは熱い息がはあはあと洩れる。そのくちびるに、ぶちゅ……結が自分の口を押しつけた。よほど気持ちいいらしい。ねっとりとした唾液をまぶしながらふたりは舌と舌をからめ始めた。加奈は一転してやさしく、二本の指腹でそっとクリトリスを揉み転がしている。
（くううっ。やばい、来ちゃう……出ちゃう。ああ、どうしよう……っ。今日もまた出しちゃう）
二日つづけての中出しはさすがにヤバいかもと思いつつ、しかし、せきとめるなん

て無理だった。
ネトネトに濡れた膣肉は歓喜してぎりぎりぎりとペニスを呑みこんできた。一気に頂点に持ち上げようとしている！
「先生、そこもうダメ。ひ、宏之くぅん、もっとゆっくりでないとわたしダメッ」
（そ、そ、そ、そんなこと言われたって！　ぼ、ぼ、ぼくももうだめだあっ！）
祐美香の膣が、祐美香の肢体が、祐美香の体温が、祐美香のしなやかさが、宏之を追いこんでいく。意識を逸らせようと思ってもうどうしようもなかった。
（あ、あ、ぼく、ぼくもう出る）
「祐美香さああんっ……っ！」
ああ出る……。
腰を中心にした震えはすぐに太ももからふくらはぎへ、肘から手首へ、背中から肩へ、首から脳天へとやってきた。太ももの裏側が引き攣って自分の身体が自分のものではなくなったように思える。痙攣は三度、四度と、たてつづけだった。
膣肉はキュッキュッキュッと強く波打って若い牡の硬い男根をそれまで以上の厳しさで絞め上げていた。子宮近くの、こまかい吸盤が密生したような粘膜は、亀頭に吸いつき密着して熱い摩擦を加えていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

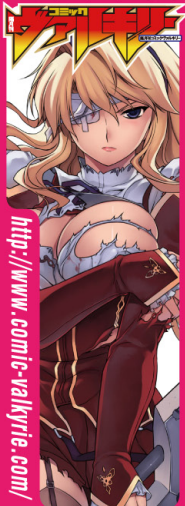
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！